

平成 25 年度 事業評価（事前・完了後の評価）技術検討会議事概要

- 1 開催日時 : 平成 26 年 2 月 18 日 13:50 ~ 15:10
- 2 開催場所 : 北海道森林管理局 2 階 第 2 研修室
- 3 出席者 : 委員 丸谷委員長、樽見委員、庄子委員
局担当者 平野計画保全部長、
小西森林整備第一課長、井貝企画係長
高尾森林整備第二課長、高橋設計指導官
島津資源活用第二課長
林治山課長、片岡上席技術指導官
平上席技術指導官、齋藤調整指導係長
佐藤監査官、石塚監査係長

4 議事概要

(計画保全部長)

本事業評価につきましては、担当の総務企画部長が所用により欠席、代行して私のほうからご挨拶させていただきます。本日、悪天候の中、お忙しいところ本検討会にご出席をいただきありがとうございます。委員の皆様におかれましては、日頃から国有林野事業の運営に当たりご指導をいただいております、この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。

事業評価につきましては、森林整備事業、治山事業といった林野公共事業の採択から完了後に至るまでの事業の実施過程の透明性、客観性を確保して効果的、効率的な事業を図ることを目的におこなっているところです。

本検討会は評価手法や透明性向上を図るにあたり委員の先生方からご意見を頂戴しているものであります。

本日の検討会につきましては、森林整備事業平成 26 年度新しい施業計画がスタートする三つの森林計画、七つの森林管理（支）署の造林、保育、林道整備これにつきまして事前評価を、治山事業につきましては、十勝岳の地域防災対策の事前評価、それと有珠山の地域防災対策の完了後の評価を対象に実施していくこととなります。

それぞれ費用対効果の分析結果等をご説明させていただきますが、各委員の皆様におかれましては忌憚のないご意見をお願いします。

本日はよろしく申し上げます。

(局担当者より説明：森林整備事業、治山事業)

(樽見委員)

B/Cは1以上あればよいのか。

(治山課長)

そのとおり。

(樽見委員)

治山事業（有珠山地区地域防災対策）の完了後の評価でB/Cが12.44となっているが、その数字はかなり成功したということか。

(治山課長)

12.44という数字自体の大小をもって事業の成功を表すものではないと考えており、事前評価の数字と比較して差がなければほぼ予定どおりの効率性を持って成果が出たという判断となる。B/Cの数字の比較だけで事業の成功に差があるものとは考えていない。

(樽見委員)

コストをかけても一定以上便益が出にくいものや、コストをかければ一定の便益が上がるものなど、ケースバイケースということか。

(治山課長)

ケースバイケースである。事業評価マニュアルに基づきB/Cを算出することとなっているが、個々の事業（今回は有珠山と十勝岳地区）の保全対象として何を見ることとなるのか、事業内容としてどの程度の事業を施工するのかによって異なってくる。

事業の必要性ということでは同じようにあってやらなければならない箇所でも計算式に当てはめるとB/Cの数値に大小の差が出てくる。

治山事業の目的を果たすため、効率性を考えてやったことが、この事業評価となったものとする。

(丸谷委員)

森林整備事業3ページの新設及び計画路線について、新設である林業専用道と規格変えた旧式の林道を併せての計画路線と考えて良いか。

(森林整備第二課長)

新設が、林業専用道で、改良が旧式の林道で、崩れたところ等の修繕である。

(丸谷委員)

新設の幅員は4mで側溝込みか。

(森林整備第二課長)

林業専用道の幅員は3m50cmで側溝込みである。

(庄子委員)

側溝込みでクラッシャーランを敷くのか。

(森林整備第二課長)

砂利敷きも含め、林業専用道は林道2級規格である。

(丸谷委員)

参考までに、十勝岳の事前評価、有珠山の完了後の評価ということだが、有珠山については、最近1977年の頂上噴火と2000年の山麓での噴火と2

回の噴火があった。

治山事業は山全体を対象とするので、有珠山の事業は1977年度から始まった。

十勝岳については、北海道の危険な5火山に対する事業の一つであり、砂防部局と治山部局で連携し、それぞれの事業目的を持って進めている。

(樽見委員)

有珠山のほうは、一通り事業は終わったということか。

(治山課長)

最初に1977年の噴火があったときは事業評価制度がなかった中で、地域防災事業としてスタートし、期中評価もやって平成19年まで実施した。1977年噴火に対する全体計画を立てたものについては終わっている。

2000年に噴火したものについては、別の事業として全域を実施、現段階も進行中である。

(樽見委員)

12.44 いうB/Cについては、景観が戻ったということを数値化するのか。

(治山課長)

見た目のものは考慮しておらず、荒廃から元の森林状態に戻ったところはB/Cの数値化はしていない。

(丸谷委員)

優先配慮事項のように、事業の実施環境等の自然環境保全機能の発揮で、点数化にならないが評価となっているものはないか。

(治山課長)

優先配慮事項欄は、事前及び期中評価だけで完了後の評価については、どうだったか景観の点数化での判断はしていない。

完了後の評価で環境的なものは、評価個表の中で事業実施による環境の変化として定性的な評価結果を記入している。

(庄子委員)

有珠山地区で、2000年、2011年の不安定土砂量の推移から2000年から2011年までの事業の評価はどうなっているのか。

溪間工などで前半10年間で効果が出きってしまい、期間全体で見れば、確かにB/Cは12.44であるが、前半のほうで稼いでしまい、後半のほうで稼いでなくて、つまり後半の事業はしなくてよかったこととなるのではないか。

(治山課長)

有珠山地区治山施設一覧表の平成2年くらいまでは、各流域に投資している。

グラフの中で、大平右の沢には、平成2年以降もかなりの事業費を投入している実態である。

これは、森林状態に戻っておらず、不安定土砂が安定しきっていないことから、不安定な面積にカウントすべきという判断をしており、現時点で不安定土砂量が想定どおり減っていない状況にある。

(丸谷委員)

厳密に言うと、火山の噴火が起こると火山灰が流域の中に溜まってそれが出てくるので、その流出を遅らせるということである。

大平右の沢については、山体が崩れている。本来は1977年の爆発だけが原因でなくて有珠山そのものが崩れていくプロセスだったから、原因の異なる崩れである。

火山灰の流出は収まっているが、山体すなわち外輪山が崩れている。

(庄子委員)

大平右の沢については、グラフの中では別物とみるべきか。

(丸谷委員)

グラフの中では、別物とみた方が良い。

(丸谷委員)

便益集計表（治山事業）の水源涵養便益は事業実施した区域が緑化され健全な森林となることで、見込まれているのか。

(治山課長)

堆砂した面積、斜面の部分が緑化されこれが健全な森林状態に戻ることで水源涵養便益を評価している。

(丸谷委員)

事前評価の十勝岳であるが、泥流の動きを考えると流動性が高いので、短いもので止めると横に溢れていくから、基数は少なくともいいから横に延ばす、囲むような形で導流堤、3ポケットにしたほうが多分効果が出る。具体的に設計施工のときとなるが、いわゆる流れを溜めるようなイメージで設計されると効果が現れると考える。

(丸谷委員)

遊砂土工模式図の考え方を説明してほしい。

(治山課長)

泥流自体がどのくらいの流動性をもっているのか、想定した範囲でシミュレーションし作成したものであり、個別具体の詳細設計には委員の意見も参考としたい。

(監査官)

これで審議を終了しますが、今回の事前評価であります森林整備7件、治山1件については新規事業の必要性、効率性、有効性の観点から妥当であると考える。

また、完了後の評価であります治山1件につきましては、事業の効果が発揮されているということでまとめさせていただきます。最終的には委員長に一任ということでよろしいでしょうか。

(各委員)

了承。

(監査官)

それでは本日の技術検討会を閉会します。

以上で審議終了